

令和 5 年度 大学活性化経費 事業成果報告書

事業区分 (6)その他、大学の活性化に貢献する取り組み

申請組織 看護学部

申請組織長 役職名 看護学部長 氏名 杉浦美佐子

統括責任者 役職名 看護学部教授 氏名 大塚敏子

課題名 千種区介護予防連携会議と椙山女学園大学(看護学部)とのコラボによる高齢者介護
予防事業

	役割	氏名	所属・役職名	役割分担
事業組織	統括責任	大塚敏子	看護学部 教授	総合調整、教室企画運営、学生サポート
	スタッフ	佐原弘子、小松美砂 肥田佳美、池俣志帆 井上千秋 大比叡和子、川上將	看護学部 教授	教室企画運営、学生サポート
			看護学部 准教授	教室企画運営、学生サポート
			看護学部 助教	教室企画運営、学生サポート
			看護学部 助手	教室企画運営、学生サポート
講師	滝本成人	生活科学部 教授	講話講師	
学外総括責任	江崎道代	千種保健センター保健予防課 課長	総合調整、教室企画運営	
学外スタッフ	内山達貴	千種保健センター保健予防課 主査	教室企画運営、千種調整窓口	
学外スタッフ	塩川智代	千種保健センター保健予防課 保健師	教室企画運営	

1. 事業開始の背景・経緯や目的等 (200字～300字程度で記述)

名古屋市千種保健センターを中心とする「千種区介護予防連携会議」と看護学部学生・教員が共同し、地域住民(千種区在住、65歳以上の方)を対象とした介護予防を目的とした教室を、本学を会場として実施した。

なお本事業は、看護学部ゼミ実習の施設指導者であった名古屋市保健師より、市の介護予防事業実施会場として本学施設の借用ができないかとの申し出があったことを契機に、この事業を学生の学修機会や地域貢献、また本学の魅力を発信する機会としても活用する方向で協議し、実施に至ったものである。

2. 事業方法(特色・独創性)等 (300字程度で記述)

1. 本事業の対象者は本学が位置する千種区の住民であるため、地元住民に本学を知っていただく機会となることや地元住民の健康向上に資することから地域貢献の意義が大きいこと。
2. 看護学部学生の実習施設・就職先である名古屋市機関との関係性強化の効果が期待できること。
3. 看護学部の学生が地域における実際の保健活動に携わることにより、ボランティア体験で一般的に得られる効果に加え、看護職としての能力を向上させる効果も期待できること。また、保健師活動に触れる貴重な機会となること。
4. 単発の事業ではなく来年度以降も継続予定であることから、継続的に看護学生のボランティア及び学修機会が得られること。
5. 他学部(生活科学部)の教員とも連携して行う事業であり、総合大学の強みを生かした企画となること。

3. 事業の成果 (600字～800字程度で記述)

【第1回】2023年10月14日(土) 9:30～12:00 於看護学部棟

<参加者> 34名 <学生ボランティア>39名

<プログラム>

1. **健康講話**：生活科学部生活環境デザイン学科の滝本成人教授が健康講話『ものを工夫し安心で自立した暮らし』を実施。片麻痺等が使う自助具開発の取組や開発された自助具を紹介した。
2. **音楽療法**：音楽療法士の山田広美氏による音楽療法を実施。参加者は音楽に合わせて体を動かしたり歌を歌ったりしながら楽しく介護予防の実践を行った。
3. **体力測定**：握力、開眼片足立ち、5m歩行（通常歩行）の3種目について測定した。学生は測定方法の説明や介助を行った。測定後は保健師による結果説明を実施した。

*参加者アンケート：「とても満足」15名、「満足」17名、「不満」0名

【第2回】2024年2月16日(金) 9:30～12:00 於本学体育館

<参加者> 39名 <学生ボランティア>35名

<プログラム>

1. **体力測定**：握力、開眼・閉眼片足立ち、5m歩行（通常歩行、最大歩行）の3種目について測定した。学生は測定方法の説明や介助を行った。測定後は保健師による結果説明を実施した。
2. **ミニ運動会**：玉入れ、ボール送り、パン食い競争の3種目を実施した。学生は参加者とともに競技に参加したり競技の介助を行った。競技後、表彰式を行った

*参加者アンケート：学生との交流事業「とても効果がある」35名、「わからない」4名

4. キーワード (本事業のキーワードを1つ以上8つ以内で記載)

①介護予防	②看護学部学生	③地域貢献	④学部間協同
⑤名古屋市	⑥	⑦	⑧

5. 事業の達成状況及び今後の課題 (事業の達成状況を踏まえて、課題、反省点、及び今後の取組みを具体的に記載すること。)

1. 本学および看護学部の魅力の発信

学生・教員の従事、本学施設での実施により、地域住民に本学の魅力を発信する機会となった。参加者からは「椙山の学生と接して大学を身近に感じた」「素晴らしい施設を使わせてもらって感謝」などの声があった。また、本事業の成果は、本学ホームページ Pick up news で発信した他、「なごや看護学会誌」に投稿した。一方、今年度は計画していた活動成果をまとめた媒体の作成に至らなかった。来年度以降も本事業は継続して実施予定のため、活動紹介の媒体作成や SNS での発信などを行い、大学や学部の魅力を発信できるとよいと考えている。

2. 学生の看護実践力や『保健師』への理解の向上

コミュニケーション能力は看護の基本であり、本事業は学生にとってその実践の場として非常に有効だったと考える（学生感想「人と関わることの第1歩をふみ出せたような気がします」）。また、地域で活動する看護職『保健師』の活動に参加したことで今後のキャリア検討にも資する経験になった。来年度についてもできるだけ多くの学生が参加の機会が得られるよう計画する。

3. 名古屋市千種区との連携強化

これまでも千種区と実習等で連携してきたが、今回の事業でより関係性が深まった。この事業をきっかけに看護学部学生のボランティア活動の場が広がり（梅毒予防啓発事業への参画など）、さらに他学部（教育学部）の学生のボランティア活動（乳幼児相談託児ボラ）にもつなげることができた。

4. 総合大学の強みを生かした地域貢献と学部間連携の強化

第1回では生活科学部等の教員にも健康講話講師として参画してもらうことで総合大学の強みを生かした地域貢献ができた。参加者からは講話について「専門的かつわかりやすい講話で大学ならではの魅力を感じた」との声があった。また、本事業での関わりが各教員の専門性を理解しあう機会となった。今後もこうした取り組みを継続し、学部間の教育・研究における連携につなげたい。